

「教科学力」と「生きる力」との関係

ベネッセ教育総研 田中 勇作

はじめに

第1節では、「教科学力と学びの基礎力の間には正の相関がある」という基本仮説1についていくつかの観点から検証し、「教科学力」の向上に関わる「学びの基礎力」育成の在り方についての考察を行った。

第2節では、「教科学力と生きる力の間には正の相関がある」という基本仮説3についての検証を通して、「学力向上のための視点」について

考察をしてみたい。

結論から先に言うと、今回の調査結果は基本仮説3の妥当性を支持するものとなった。本節では、第1節で基本仮説1の検証に用いた手法や観点に加えて、「生きる力」と「教科学力」の領域・観点別の関係についても分析・考察をしていく。

1 「生きる力」の高低による「教科学力」の差異

それでは、まず最初に前節で「学びの基礎力」と「教科学力」の関係を見たのと同様の方法に沿って、基本仮説3を検証していきたい。

次ページの図表3-2-1は、「生きる力」の4つの各領域の各下位能力に対する子どもたちの回答状況と教科総合スコアの関係を示した。なお、表の構成要素については第1節で用いた図表3-1-1に準ずるので、ここでは説明を省略させていただく。

(1) 「問題解決力」と「教科学力」との関係について

さて、まず「1. 問題解決力」についてみると、小5生・中2生共に肯定群と否定群の教科総合スコアに有意な差異が認められた項目は全10項目中8項目にのぼる。その差が最も大きく見られたのは、「調べたことや考えたことを、文や絵などにまとめることができる」となり、「調べてわかったことをもとに、自分なりの考えを持つことができる」、「筋道を立てて、ものごとを考えることができる」といった項目が続く。

今回の調査では、こうした力を順に「作品制作力」「調査研究力」「論理的思考力」として設

定しているが、小中学校において「総合的な学習の時間」等を通して、その育成を図ろうとする取り組みが多数なされている。その中でも、数年にわたって積極的に問題解決型の総合学習に取り組んでこられた京都市立御所南小学校は、この後、第5章でその実践等を報告していただいているので詳細は省略させていただくが、まさに「問題解決力」が「教科学力」にも大きな影響を及ぼしていることを実践を通して検証された好事例といえる。

さて、後で改めて述べるが、数量化I類によって算出したアイテムレンジを分析すると、小5生においては、これらの3つの力が算数の「応用的問題」や「数学的な考え方」のスコアに対して相対的に大きな寄与度を示しており、国語においては、「作品制作力」は「書く力」や「知識・理解」、「調査研究力」は「書く力」や「読む力」のスコアにそれぞれ大きく寄与していることがわかった(図表3-2-8参照)。また、中2生においては、「論理的思考力」は国語・数学・英語の各レベル・観点で、「作品制作力」は国語・英語の各レベル・観点で、そして、「調査研究力」は数学の「数学的な考え方」「表現・処理」および

■図表 3-2-1 「生きる力」4 領域と教科総合スコアのクロス

領 域	下位能力	設問 番号	設 問	群	教科総合スコア	
					小5	中2
1.問題解決力	作品制作力	問4④	調べたことや考えたことを、文や絵などにまとめることができる。	肯定	51.3	51.8
				否定	47.6	48.2
	調査研究力	問4③	調べてわかったことをもとに、自分なりの考えを持つことができる。	肯定	51.2	51.5
				否定	47.8	48.0
	論理的思考力	問4⑤	筋道を立てて、ものごとを考えることができる。	肯定	51.4	52.1
				否定	48.6	48.1
	メディアリテラシー	問4⑨	電子メールを使ったり、インターネットに書きこみをしたりする時は、きまりを守ったり相手の気持ちを考えたりしている。	肯定	51.0	50.7
				否定	47.7	47.6
情報活用力	問4⑩	調べたことを、コンピュータを使ってまとめたり、発表したりすることができる。	肯定	51.5	51.7	
			否定	48.4	48.5	
自己表現力	問4⑦	自分の考えや意見を相手にわかりやすく伝えることができる。	肯定	51.3	51.3	
			否定	48.7	49.1	
企画実践力	問4②	自分が調べてみたいことについて、そのための計画を立てることができる。	肯定	51.0	51.5	
			否定	48.9	49.2	
課題設定力	問4①	身のまわりのことや自分が体験したことから、もっと調べてみたいことを見つけることができる。	肯定	50.9	51.1	
			否定	48.7	49.1	
2.社会的実践力	社会対応力	問4⑬	テレビのニュースや新聞などを見て、最近の社会のできごとをよく知っている。	肯定	51.5	50.9
				否定	47.6	48.7
	公共性	問5①	学校や社会のルールを守り、マナーを大切にしている。	肯定	50.7	50.5
				否定	47.1	48.5
	社会貢献	問4⑮	社会がかかえる課題について、どうすればよいかを考えたことがある。	肯定	51.6	51.7
否定				49.0	48.9	
協調性	問4⑪	意見のちがう人とも協力し合うことができる。	肯定	50.8	51.0	
否定	48.3	48.5				
トラブル解決力	問4⑫	もめごとが起こったときには、間に立ってまとめ役になることができる。	肯定	51.1	51.1	
			否定	49.3	49.5	
3.豊かな心	責任感	問5③	自分がやらなければならないことは、責任を持ってやりぬくようにしている。	肯定	50.8	51.0
				否定	47.2	46.4
	バランス感覚	問5⑧	自分とちがう意見も大切にしている。	肯定	50.9	51.5
				否定	48.2	47.8
	礼儀・マナー	問5⑨	「ありがとう」「ごめんなさい」が自然に言える。	肯定	50.4	50.4
				否定	48.1	48.7
	勇気・熱意	問5④	むずかしいことでも、失敗をおそれずに取り組んでいる。	肯定	50.7	51.0
否定				48.9	48.8	
思いやり	問5⑤	家族を尊敬し、大切にしている。	肯定	50.3	50.3	
			否定	47.7	49.3	
創造的態度	問5⑥	いつも新しいアイデアを考えたり、工夫したりしている。	肯定	51.0	50.7	
否定	48.6	49.4				
4.自己成長力	成長動機	問5⑩	自分の力をできるだけ伸ばしたいと思う。	肯定	50.6	50.6
				否定	44.7	44.0
	自信・自尊感情	問5⑬	自分はまわりの人からみとめられていると思う。	肯定	50.8	51.5
				否定	49.4	49.2
進路決定力	問5⑮	将来やってみたい仕事について、家族と話をすることがある。(※)	肯定	50.5	50.9	
			否定	49.3	49.3	
自己理解力	問5⑫	どんなことが自分に向いているのかを知っている。	肯定	50.4	50.7	
			否定	49.4	49.4	

(※) 問5⑮の中 2 生の設問は、「希望する進路について、自分でよく調べている」

「応用的問題」で相対的に高い寄与を示すことが明らかになっている(図表3-2-9参照)。

さて、図表3-2-1に戻ると、その他の「メディアリテラシー」「情報活用力」「自己表現力」「企画実践力」「課題設定力」といった下位能力においても、教科総合スコアは肯定群>否定群となり、「問題解決力のスコアが高い子どもはそうでない子どもに比べて、教科学力は有意に高い」ということが読み取れる。

(2) 「社会的実践力」と「教科学力」の関係について

次に、図表3-2-1の「2. 社会的実践力」について見てみると、全7項目のうち表に示した5項目が小5生・中2生共に肯定群と否定群の教科総合スコアに有意な差異が認められた。

肯定群と否定群の差異が最も大きい項目は、小5生では「テレビのニュースや新聞などを見て、最近の社会のできごとをよく知っている」、中2生では「社会がかかえる課題について、どうすればよいかを考えたことがある」となり、これらの項目は小5生・中2生に共通する上位3項目にはいる。

また、先ほどの「1. 問題解決力」と同様、各学年における肯定・否定群の差異が最も大きい項目の教科の観点別スコアに対するアイテムレンジを分析すると、小5生では、「テレビのニュースや新聞などを見て、最近の社会のできごとをよく知っている(社会対応力)」という項目では、国語の「書く」「読む」「知識・理解」、算数の「数学的な考え方」「表現・処理」「知識・理解」の全ての観点に対して突出した寄与を示していることがわかる(図表3-2-8参照)。

一方、中2生では、「社会がかかえる課題について、どうすればよいかを考えたことがある(社会貢献)」という項目では、国語や数学では

それほどの高い寄与は見られないが、英語では、どの観点・レベルにおいても高い寄与を示している(図表3-2-9参照)。

さて、この「2. 社会的実践力」について「学びの基礎力」との相関関係を見てみると、図表3-2-2に示すように、「テレビのニュースや新聞などを見て、最近の社会のできごとをよく知っている(社会対応力)」という項目は、「学びの基礎力」の「B. 学びに向かう力」および「C. 自ら学ぶ力」の領域で、相関係数が0.20以上の有意な正の相関を示す項目が多くみられる。

「最近の社会のできごとを知るために、テレビのニュースや新聞などを見る」という活動が子どもたちの学習動機を刺激し、その結果として自己効力感を高めていることがうかがえる。

また、「自ら学ぶ力」の「C2. 学習定着の方略」の各項目との間においては相対的に高い正の相関がみられることから、「最近の社会のできごとを知るために、テレビのニュースや新聞などを見る」という活動は「学びに向かう力」を高め、「精緻化方略」「体制化方略」といった学習方略を身につけることによって、「教科学力」の向上へとつながっていくという構図を仮定することもできる。

ただ、これらの関連はあくまでも実態としての相関を示すものであり、因果関係を示すものではないので仮説の域を出ない。今後、具体的な実践を通してこの仮説が検証されていくことを期待したい。

(3) 「豊かな心」と「教科学力」との関係について

次に、「3. 豊かな心」について見ると、全7項目のうち図表3-2-1に示した6項目で小5生・中2生共に肯定群と否定群の教科総合スコアに有意な差異が認められた。

■図表 3-2-2 「社会対応力」と「学びの基礎力」の相関(0.20以上)

領域	カテゴリー	下位項目	設問番号	設問項目	相関係数
A. 豊かな基礎体験	A2.メディア体験	新聞との接触	問1⑦	新聞のニュース記事を読む。	0.3609
		インターネットへの接触	問1⑧	インターネットを使って何かを調べる。	0.2148
	A3.他者との支え合い	友達との支え合い	問3①	自分の考えや気持ちを理解してくれる友だちがいる。	0.2010
B. 学びに向かう力	B1.感じ取る力	知的的好奇心	問3⑧	ふだんから「ふしぎだな」「なぜだろう」と感じる人が多い。	0.2312
		感性の豊かさ	問3⑨	本やドラマなどを見て、人の生き方に感動することがある。	0.2739
	B2.学習動機	学習の役立ち感	問6③	勉強して身につけた知識は、いずれ仕事や生活の中で役に立つと思う。	0.2455
		学習活動の充実感	問6④	勉強して何かがわかるようになっていくことはうれしい。	0.2151
		学力向上心	問6⑤	勉強をして、もっと力や自信をつけたいと思う。	0.2134
	B3.自己効力感	自己肯定感	問3⑩	自分は、やればできると思う。	0.2115
		自己有能感	問3⑭	友だちから認められるような得意なことがある。※	0.2431
		達成経験	問3⑰	ものごとをやりとげた時のよろこびを味わったことがある。	0.2397
	B4.自己責任	失敗を活かす力	問6②	勉強で同じまちがいをくり返さないように気をつけている。	0.2536
	C. 自ら学ぶ力	C1.学習スキル	ノートの取り方	問8②	絵や図などを使って、わかりやすくノートにまとめている。
学び方の工夫			問8③	友だちや先生から聞いた勉強のやり方を参考にしている。	0.2470
C2.学習定着の方 略		反復方略	問8④	新しく習ったことは、何度もくり返し練習している。	0.2457
		精緻化方略	問8⑩	授業で習ったことを、自分なりにわかりやすくまとめている。	0.2779
		体制化方略	問8⑪	授業で習ったことはその理由や考え方もいっしょに理解している。	0.2823
		体制化方略	問8⑤	授業で習ったことをふだんの生活と結びつけて考えている。	0.3102
C3.学習計画力		学習状況の評価	問6⑩	それぞれの教科の内容を自分がどれくらい理解できているかわかっている。	0.3271
		学習目標・課題の認識	問6⑥	今の自分にとって、どんな勉強をしなければならないかをよくわかっている。	0.2043
		学習計画の立案	問7⑥	ふだんから計画を立てて勉強している。	0.2441
C4.自宅学習習慣		復習の習慣	問8⑨	授業で習ったことは、その日のうちに復習している。	0.2079
		自主的な学習	問8⑫	興味を持ったことは、自分で進んで勉強している。	0.2315
D. 学びを律する力	D1.学習継続力	積み上げる力	問7①	何ごとに対しても、こつこつ努力している。	0.2211
		遂行力	問7③	わからないことはそのままにせず、わかるまでがんばっている。	0.2147
	D3.学習環境の整備	学習時の姿勢	問7⑦	正しい姿勢で机に向かって勉強している。	0.2044
		学習への準備	問7⑪	必要なものをきちんとそろえてから勉強を始めている。	0.2254
	D4.授業への構え	積極的な参画	問7⑬	授業を熱心に受けている。	0.2429
		聞き話す構え	問3⑬	相手の目を見て、はっきりと話している。	0.2492

※問3⑭の中2生の設問は、「自分の意思や行動は、周りの人に良い影響を与えていると思う」

肯定群と否定群の差異が最も大きい項目は、「自分がやらなければならないことは、責任を持ってやりぬくようにしている」となり、次いで「自分とちがう意見も大切にしている」で大きな差異が見られる。こうした自己をコントロールしたり、他者を認めたりするという力は、「学びの基礎力」における「学びを律する力」とも通じるものがあり、全体としても「豊かな心のスコアが高い子どもは、教科学力も高い」ということが認められた。

(4) 「自己成長力」と「教科学力」との関係

最後に、「4. 自己成長力」と「教科学力」の関係について見てみたい。「自己成長力」においては、全6項目のうち図表3-2-1に示した4項目で小5生・中2生共に肯定群と否定群の教科総合スコアに有意な差異が認められた。

肯定群と否定群の差異が最も大きい項目は、「自分の力をできるだけ伸ばしたいと思う(成長動機)」であるが、その差異は小5生・中2生共に偏差値換算で5ポイント以上と大きく開き、「生きる力」の全30項目の中でも教科総合スコアに対する影響度は突出して高い。

また、これまでの3つの領域と同様、図表3-2-8および9に示したアイテムレンジを分析すると、小5生・中2生共に、この「自分の力をできるだけ伸ばしたいと思う」という項目は、国語、算数・数学、および英語の全ての観点・レベルに対して突出した寄与を示している。

また、次ページの図表3-2-3に示すようにこの「自分の力をできるだけ伸ばしたいと思う」という項目と、「学びの基礎力」の各項目の相関を見ると、「B. 学びに向かう力」および「D. 学びを律する力」の2つの領域で全項目に対して有意な正の相関を示し、「C. 自ら学ぶ力」においても約9割の項目で有意な正の相関が見られた。更に、「学びに向かう力」の中では「勉強して、もっと力や自信をつけたいと思う(学力向上心)」や

「勉強して何かがわかるようになっていくことはうれしい(学習活動の充実感)」および、「勉強して身につけた知識は、いずれ仕事や生活の中で役に立つと思う(学習の役立ち感)」、「学びを律する力」の中では「授業を熱心に受けている(積極的な参画)」、「何ごとに対しても、こつこつ努力している(積み上げる力)」や「わからないことはそのままにせず、わかるまでがんばっている(遂行力)」といった各項目との間に強い相関が見られる。

つまり、「自分の力をできるだけ伸ばしたい」という項目に代表される「自己成長への意欲」は、教科学力向上の原動力としての「学びに向かう力」や、更にそれを強化する「学びを律する力」に対しても非常に大きな影響力を示し、学力向上を考える上での重要な要素となっていることがうかがえる。

さて、「自分の力をできるだけ伸ばしたい」という項目は、「学びの基礎力」の「勉強をして、もっと力や自信をつけたいと思う(学力向上心)」という項目と同義ではないのかという指摘もあり、両者の相関も極めて高いことから否定しきれるものではない。しかし、第2章第3、4節で見たように、「生きる力」における「成長動機」は小5生・中2生共に約9割の子どもが肯定している一方で、「学びの基礎力」における「学力向上心」の肯定割合は、小5生・中2生共に約8割と10ポイント低く、トップボックスでは小5生では12ポイント、中2生では25ポイントも低く、両者が全く同じものを見ている訳ではない。

つまり、広い意味での「技能や能力(たとえばスポーツや芸術、遊びも含めて)」の向上についてはほとんどの子どもたちが望んでいるが、「学力(教科学力)」という若干狭義の力の向上となると、積極的に望む割合は低くなっており、両者は包含関係にあることを示しているといえよう。

そう考えると、たとえ「教科学力」以外のより広義な対象に対する「成長動機」であれ、子どもたちの「教科学力」に非常に大きな影響力を及ぼしているという事実は注目に値する。

つまり、一見「教科の勉強から逃避」のように

■図表 3-2-3 「成長動機」と「学びの基礎力」の相関 (0.20以上)

領域	カテゴリー	下位項目	設問番号	設問項目	相関係数	
A. 豊かな基礎体験	A2.メディア体験	新聞との接触	問1⑦	新聞のニュース記事を読む。	0.2095	
	A3.他者との支え合い	家族との支え合い	問3①	自分の考えや気持ちを理解してくれる友だちがいる。	0.2149	
		友達との支え合い	問3②	家族は自分のことを気にかけてくれていると思う。	0.2330	
		教師への信頼	問3④	学校の先生は自分のことを認めてくれていると思う。	0.2021	
B. 学びに向かう力	B1.感じ取る力	知的好奇心	問3⑧	ふだんから「ふしぎだな」「なぜだろう」と感じることが多い。	0.2168	
		感性の豊かさ	問3⑨	本やドラマなどを見て、人の生き方に感動することがある。	0.2047	
		学習の役立ち感	問6①	勉強していて、おもしろい、楽しいと思うことがよくある。	0.2859	
	B2.学習動機	学習の役立ち感	問6③	勉強して身につけた知識は、いずれ仕事や生活の中で役に立つと思う。	0.3066	
		学習活動の充実感	問6④	勉強して何かがわかるようになっていくことはうれしい。	0.3964	
		学力向上心	問6⑤	勉強をして、もっと力や自信をつけたいと思う。	0.4283	
	B3.自己効力感	自己肯定感	問3⑩	自分は、やればできると思う。	0.3470	
		自己有能感	問3⑭	友達から認められるような得意なことがある。※	0.2606	
		達成経験	問3⑰	ものごとをやりとげた時のよろこびを味わったことがある。	0.3606	
	B4.自己責任	自助努力	問6⑦	努力をして、苦手な教科も得意になるようにしたい。	0.3428	
		自助努力	問6⑧	成績が悪かったときは、自分の努力が足りなかったからだと思う。	0.2780	
		自己強化力	問6⑨	がんばって勉強したときは、自分をほめたい気持ちになる。	0.2663	
		失敗を活かす力	問6②	勉強で同じまちがいをくり返さないように気をつけている。	0.3484	
	C. 自ら学ぶ力	C1.学習スキル	ノートの取り方	問8①	黒板に書かれたことは、きちんとノートに書いている。	0.2052
			ノートの取り方	問8②	絵や図などを使って、わかりやすくノートをまとめている。	0.2015
			学び方の工夫	問8③	友だちや先生から聞いた勉強のやり方を参考にしている。	0.2794
C2.学習定着の方略		反復方略	問8④	新しく習ったことは、何度もくり返し練習している。	0.2828	
		精緻化方略	問8⑩	授業で習ったことを、自分なりにわかりやすくまとめている。	0.2685	
		体制化方略	問8⑪	授業で習ったことはその理由や考え方もいっしょに理解している。	0.2612	
		体制化方略	問8⑤	授業で習ったことをふだんの生活と結びつけて考えている。	0.2656	
C3.学習計画力		学習状況の評価	問6⑩	それぞれの教科の内容を自分がどれくらい理解できているかわかっている。	0.2599	
		学習目標・課題の認識	問6⑥	今の自分にとって、どんな勉強をしなければならないかをよくわかっている。	0.2280	
		学習計画の立案	問7⑥	ふだんから計画を立てて勉強している。	0.2142	
C4.自宅学習習慣		自主的な学習	問8⑧	家族に言われなくても、自分から進んで勉強している。	0.2031	
		自主的な学習	問8⑫	興味を持ったことは、自分で進んで勉強している。	0.2423	

※問 3⑭の中 2 生の設問は、「自分の意思や行動は、周りの人に良い影響を与えていると思う」

■図表 3-2-3 (つづき)

領域	カテゴリー	下位項目	設問番号	設問項目	相関係数
D. 学びを律する力	D1. 学習継続力	積み上げる力	問7①	何ごとに対しても、こつこつ努力している。	0.3346
		克己心	問7②	自分のなまけ心に負けないようにしている。	0.2846
		遂行力	問7③	わからないことはそのままにせず、わかるまでがんばっている。	0.3234
	D2. 学習のけじめ	意識の切り替え	問7④	勉強するときはしっかり勉強し、遊ぶときはしっかり遊んでいる。	0.2595
		集中力	問7⑤	勉強するときは、他のことに気を取られないで集中している。	0.2329
	D3. 学習環境の整備	学習時の姿勢	問7⑦	正しい姿勢で机に向かって勉強している。	0.2105
		学習への準備	問7⑩	必要なものをきちんとそろえてから勉強を始めている。	0.2105
	D4. 授業への構え	積極的な参画	問7⑬	授業を熱心に受けている。	0.3458
		聞き話す構え	問3⑬	相手の目を見て、はっきりと話している。	0.2646

見えるそうしたより広義な「成長動機」を持つことも、決して「教科学力」の向上意欲や努力を妨げたり、教科学力の低下を招いたりするものではなく、「伸ばしたいと思う力・対象」が明確となり、それに向かっての具体的な努力がなされていく過程で、子どもたちは「積み上げる力」や「遂行力」を身につけ、「やればできる」といった「自己肯定感」や「自己有能感」を育てていくと考えられる。

そして、そうした自信や「達成経験」、成功体験が、「教科学習」という対象に対しても「般化」され、教科学力の向上にもつながっていくという構図(仮説)が浮かび上がってくる。

以上はあくまでも仮説に過ぎないが、先生方からよくうかがう「クラブ活動やその他の諸活動にのめり込む子どもたちが、ある契機に一度むけた成長を遂げた」という話は、この仮説を支持する具体的な事例といえるかも知れない。

2 「生きる力」各領域と「教科学力」との相関について

さて、次ページの図表 3-2-4~7 は、第 3 章第 1 節で見た「学びの基礎力」各領域と教科総合スコアの関係を表した図表 3-1-2 等と同様の手順で、「生きる力」の各領域と教科総合スコアの関係を見たものである。ここでは、詳細の説明は割愛するが、「1. 問題解決力」「2.

社会的実践力」「3. 豊かな心」および「4. 自己成長力」のいずれにおいても、小5生・中2生ともに教科総合スコアとの間の正の相関が明らかに認められ、「生きる力と教科学力の間には正の相関がある」という基本仮説 3 が検証されたことを紹介しておきたい。

3 「教科学力」の諸相から見た「生きる力」の影響度

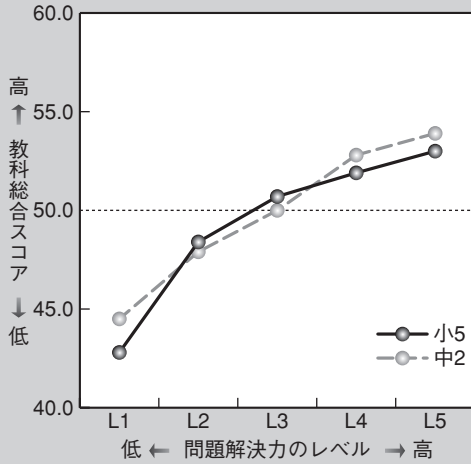
(1) 教科総合スコアに対する「生きる力」の影響度について

次に、前述の 1 「生きる力の高低による教科学力の差異」でもふれたが、「生きる力」の各下位能

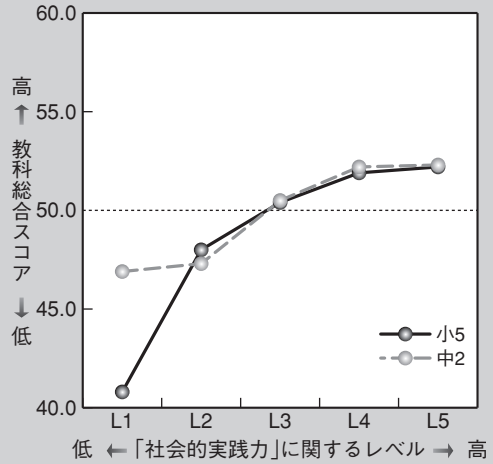
力が、教科領域や観点別に見た場合の「教科学力」にどのような影響を及ぼしているかを図表 3-2-8、および図表 3-2-9 から探ってみよう。

図表 3-2-8 および、図表 3-2-9 は、第 3 章第 1 節で用いた数量化 I 類によって各教

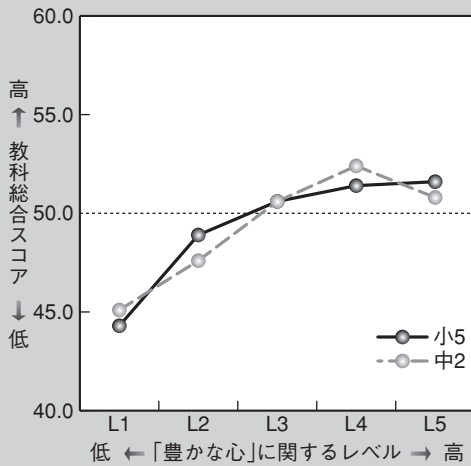
■図表 3-2-4 「問題解決力」のレベルと「教科学力」の関係



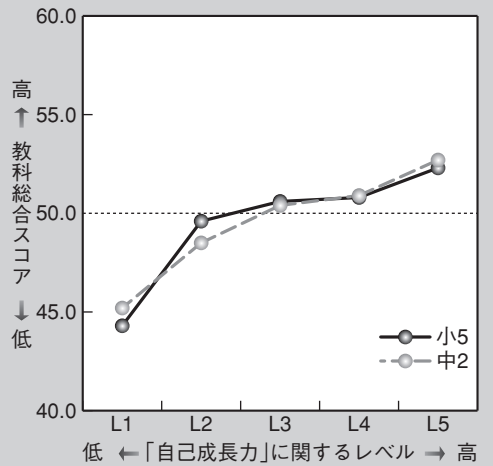
■図表 3-2-5 「社会的実践力」のレベルと「教科学力」の関係



■図表 3-2-6 「豊かな心」のレベルと「教科学力」の関係



■図表 3-2-7 「自己成長力」のレベルと「教科学力」の関係



科(小5生；国・算、中2生；国・数・英)、問題レベル(基礎的問題・応用発展的問題)、学力3観点(国；書く力／読む力／言語についての知識・理解、算・数；数学的な考え方／数量や図形についての表現・処理／数量や図形についての知識・理解、英；表現／理解／言語や文化についての知識・理解)ごとに算出した生きる力の各下位能力のアイテムレンジ(影響度)を一

覧化したものである。なお、第3章第1節でも述べたように、この数値は相対的なもので、各列における相対的な影響力の大きさを表しており、各列間における影響力の強さを示すものではないことを改めてお断りしておきたい。

なお、表中の濃い網掛けは、「生きる力」30項目において教科の各観点における影響力の強い上位5項目を示しており、濃い網掛けの項目が

■図表 3-2-8 「教科学力」の領域・観点に及ぼす「生きる力」の影響度〈小5〉

領域	下位能力	教科総合	国語						算数					
			全体	問題レベル		3観点			全体	問題レベル		3観点		
				基本	応用	書く	読む	知識・理解		基本	応用	数学的考え方	表現・処理	知識・理解
1. 問題解決力	問4① 課題設定力	0.43	0.98	0.49	2.36	0.80	1.30	0.37	0.50	0.38	0.76	1.37	0.58	0.34
	問4② 企画実践力	0.18	0.17	0.48	0.69	0.21	0.36	0.84	0.19	0.48	0.42	0.91	0.34	0.77
	問4③ 調査研究力	1.30	2.14	1.81	3.07	3.31	3.03	1.52	1.31	0.41	3.22	4.11	0.56	1.20
	問4④ 作品制作力	1.76	2.22	2.25	2.14	3.99	2.48	1.85	2.20	1.32	4.07	4.20	2.35	1.20
	問4⑤ 論理的思考力	0.40	0.62	1.09	0.69	0.29	0.65	1.57	2.00	1.19	3.72	3.60	2.12	0.74
	問4⑥ 判断力	0.45	0.50	1.02	0.95	1.35	0.27	0.83	0.62	0.78	0.26	0.36	1.14	0.46
	問4⑦ 自己表現力	0.90	0.97	0.51	2.27	1.12	1.24	0.72	1.24	1.11	1.52	2.43	1.61	0.52
	問4⑧ コミュニケーション力	0.82	0.87	0.63	1.54	2.20	1.33	0.53	1.31	0.92	2.12	1.85	1.23	0.87
	問4⑨ メディアリテラシー	1.33	2.45	2.18	3.21	5.64	3.38	1.48	1.17	1.40	0.68	1.33	1.57	0.11
	問4⑩ 情報活用力	1.28	1.74	1.58	2.19	2.03	1.14	1.95	1.39	0.77	2.71	1.31	1.66	1.76
2. 社会的実践力	問4⑪ 協調性	0.62	0.87	1.06	0.32	1.52	0.23	1.32	1.02	0.97	1.15	0.03	0.93	1.10
	問4⑫ トラブル解決力	0.01	0.05	0.09	0.43	0.90	0.25	0.23	0.22	0.21	1.13	0.55	0.11	0.60
	問4⑬ 社会対応力	2.31	2.67	2.13	4.19	5.24	3.20	2.17	3.36	2.38	5.42	5.61	3.51	2.09
	問4⑭ 共生力	1.30	0.66	0.63	0.76	0.98	0.40	0.78	2.57	2.01	3.76	3.34	2.76	2.19
	問4⑮ 社会貢献	1.13	0.90	0.39	2.31	0.58	0.56	0.82	2.01	1.41	3.28	4.61	1.82	0.97
	問5① 公共性	1.36	1.73	1.05	3.66	2.84	2.77	0.72	1.87	2.33	0.89	0.72	3.10	1.76
3. 豊かな心	問5② 社会参加	0.08	0.61	1.19	1.01	0.43	0.00	1.16	0.73	0.09	2.47	2.35	0.72	0.14
	問5③ 責任感	1.48	1.40	1.64	0.72	1.24	1.18	2.06	2.19	1.78	3.07	3.21	2.50	2.17
	問5④ 勇気・熱意	0.56	1.56	1.28	2.36	2.09	1.70	1.12	0.16	0.28	0.10	0.77	0.22	0.40
	問5⑤ 思いやり	0.08	0.41	0.62	0.18	1.52	0.34	0.66	0.44	0.22	1.86	0.56	0.49	0.46
	問5⑥ 創造的態度	0.53	0.31	0.18	0.68	0.68	0.43	0.36	1.15	0.96	1.55	1.45	0.77	1.48
	問5⑦ 楽しむ力	0.63	1.02	1.15	0.66	0.19	0.50	1.53	0.36	0.34	0.40	2.22	0.28	0.23
	問5⑧ バランス感覚	0.30	0.66	0.63	0.71	1.78	0.67	0.80	0.40	0.63	0.07	1.10	0.63	0.69
	問5⑨ 礼儀・マナー	0.25	0.30	0.53	2.62	0.58	1.08	0.36	0.07	1.24	2.41	2.47	0.44	1.18
4. 自己成長力	問5⑩ 成長動機	3.93	4.48	4.85	3.45	6.92	4.32	4.47	5.56	5.65	5.34	4.31	5.72	5.72
	問5⑪ 自己コントロール	1.64	1.75	1.17	3.37	2.70	2.11	1.36	2.44	1.79	3.81	5.20	2.47	1.93
	問5⑫ 自己理解力	1.25	1.27	1.42	0.84	0.79	1.37	1.24	1.90	1.33	3.13	2.88	2.11	1.34
	問5⑬ 自信・自尊感情	0.02	0.14	0.13	0.90	0.53	0.73	0.05	0.27	0.22	1.33	0.14	0.23	0.08
	問5⑭ 自己実現力	1.23	1.09	0.75	2.04	3.25	1.63	0.55	2.40	2.16	2.92	3.70	2.65	1.68
	問5⑮ 進路決定力	0.05	0.31	0.42	0.02	1.47	0.52	0.62	0.03	0.03	0.02	0.23	0.03	0.05

※図表中の数値は、表頭の教科の各スコアに対する「生きる力」下位能力それぞれのアイテムレンジを表す。
 数値が大きいほど教科の各スコアに対する寄与度が高いことを示す。濃い網掛けは、各列の中での数値の高い上位5項目、薄い網掛けは「生きる力」各領域内での上位3項目までを示している。

多い領域ほど、その教科の観点や問題レベルに対して強い影響力を持っていると言える。また、薄い網掛けは、「生きる力」各領域内での影響力が相対的に高い上位3項目を示している。

まず、小5生のデータを示す図表3-2-8から見てみると、2教科総合スコアに対する影響力が強い上位5項目(濃い網掛け参照)は、突出したスコアを示す「成長動機;自分の力をできるだけ伸ばしたいと思う」(3.93)を筆頭に、「社会対応力;テレビのニュースや新聞などを見

て、最近の社会の出来事をよく知っている」(2.31)、「作品制作力;調べたことや考えたことを、文や絵などにまとめることができる」(1.76)、「自己コントロール力;イライラしているときでも、まわりの人の意見を聞く事ができる」(1.64)、「責任感;自分がやらなければならないことは、責任を持ってやりぬくようにしている」(1.48)となり、当然のことではあるが、前述の図表3-2-1で見た肯定・否定両群の教科総合スコアの差異が大きな項目と合致する。

その中でも、「成長動機」や「社会対応力」は、両教科の各問題レベル、学力観点全てにおいて、教科スコアに強い影響を及ぼしており、「自分の力を伸ばしたい」と思う自己成長への願いと、「自らの自己成長の場である社会を積極的に知る」という具体的な行動・態度の重要性を改めて示す結果と言えよう。

また、図表3-2-9からは、中2生の3教科総合スコアに対する上位5項目として、やはり「成長動機」(4.42)の影響力が圧倒的に強く、「責任感」(2.38)、「バランス感覚；自分とちが

う意見も大切にしている」(2.19)、「コミュニケーション力；大人や初めて会った人とでも、はずかしがらずに話ができる」(1.73)、「自己コントロール力」(1.72)となり、小5生との違いとしては「バランス感覚」や「コミュニケーション力」といった項目が上位に浮上し、「社会対応力」や「作品制作力」の影響は相対的に弱くなる傾向が見られる。

「大人や初めて会った人とでも、はずかしがらずに話ができる」という「コミュニケーション力」や「自分とちがう意見も大切に使う」という

■図表3-2-9 「数科学力」の領域・観点に及ぼす生きる力の影響度〈中2〉

領域	下位能力	教科総合	国語						数学						英語					
			全体	問題レベル		3観点			全体	問題レベル		3観点			全体	問題レベル		3観点		
				基本	応用	書く	読む	知識・理解		基本	応用	数式的考え方	表理的処理	知識・理解		基本	応用	表現	理解	知識・理解
1. 問題解決力	問4① 課題設定力	0.05	0.12	0.36	1.06	1.68	1.14	0.30	0.08	0.61	0.70	0.56	0.07	0.09	0.70	0.02	1.94	0.24	0.79	1.48
	問4② 企画実践力	0.09	0.33	0.48	0.02	0.35	0.53	0.20	0.23	0.33	0.10	0.51	0.70	0.09	0.22	0.24	0.02	0.04	0.32	1.69
	問4③ 調査研究力	1.08	1.80	1.68	2.03	3.39	2.10	1.43	2.35	1.46	3.69	4.56	3.12	1.42	2.03	2.59	1.06	2.40	2.10	1.87
	問4④ 作品制作力	1.56	4.34	4.33	4.32	5.42	4.57	4.11	2.52	1.91	3.42	1.81	2.29	2.82	3.75	3.95	3.35	3.75	3.22	3.04
	問4⑤ 論理的思考力	1.54	3.67	3.99	2.90	2.98	3.93	3.64	3.26	2.30	4.74	4.63	3.47	2.83	3.10	3.39	2.53	3.07	2.84	3.68
	問4⑥ 判断力	0.16	0.66	0.95	0.09	0.05	0.31	1.21	0.19	0.17	0.74	0.83	0.42	0.06	0.40	0.15	1.52	0.24	0.94	0.45
	問4⑦ 自己表現力	0.44	0.12	0.40	1.08	0.62	0.94	0.48	0.20	0.17	0.24	0.21	0.14	0.09	0.90	0.83	0.94	1.28	0.17	0.95
	問4⑧ コミュニケーション力	1.73	2.97	3.15	2.50	2.34	2.12	3.54	3.25	2.97	3.76	3.76	2.60	3.59	3.06	3.43	2.42	3.28	2.26	3.40
	問4⑨ メディアリテラシー	1.34	2.01	1.89	2.24	2.57	3.51	1.03	1.02	1.16	0.87	0.25	1.21	0.89	2.90	2.33	4.14	2.76	3.49	2.67
	問4⑩ 情報活用能力	1.30	2.03	1.80	2.51	1.85	2.32	1.66	2.78	2.76	2.93	2.72	2.45	2.88	2.78	3.22	2.04	2.74	2.62	2.61
2. 社会的実践力	問4⑪ 協調性	0.71	1.27	1.23	1.29	0.71	0.84	1.44	2.56	2.27	2.99	3.49	2.34	2.46	1.61	1.66	1.53	2.23	0.89	2.28
	問4⑫ トラブル解決力	0.26	0.61	1.14	0.37	0.01	0.36	1.32	0.23	0.54	1.44	1.10	0.55	1.04	0.26	2.28	0.09	0.65	0.08	0.03
	問4⑬ 社会対応力	0.70	1.08	0.62	2.09	2.86	2.30	0.01	0.72	0.74	0.64	0.36	0.75	0.76	1.43	2.09	0.32	0.65	1.79	1.47
	問4⑭ 共生力	1.00	1.73	1.96	1.28	1.10	1.75	1.64	2.21	2.44	1.85	2.82	2.66	1.69	1.47	1.17	2.02	1.40	0.61	1.90
	問4⑮ 社会貢献	1.17	2.38	2.97	1.17	0.11	1.39	3.33	1.37	0.51	2.66	3.63	2.21	0.42	3.82	3.76	3.86	3.30	3.39	4.65
	問5① 公共性	0.40	2.14	1.92	2.61	2.69	2.06	2.15	0.23	0.39	1.19	0.92	0.04	0.41	1.68	1.99	1.13	2.34	0.88	2.86
3. 豊かな心	問5② 社会参加	1.47	2.10	2.12	2.08	2.80	3.87	0.75	2.05	1.34	3.02	3.07	2.69	1.65	2.81	3.01	2.40	2.92	2.37	2.54
	問5③ 責任感	2.38	5.30	5.47	5.01	6.32	4.59	5.79	3.60	2.88	4.65	4.11	3.93	2.72	4.09	3.93	4.57	3.60	3.22	4.67
	問5④ 勇気・熱意	0.20	0.73	0.20	2.65	0.76	2.23	0.16	0.95	0.40	1.84	3.15	0.88	0.95	0.76	0.83	0.57	1.13	0.14	1.81
	問5⑤ 思いやり	1.25	2.10	1.81	2.58	2.43	2.52	1.77	3.24	2.44	4.45	3.90	2.74	3.67	0.45	0.72	0.07	0.68	0.36	0.57
	問5⑥ 創造的態度	0.91	1.42	2.00	0.25	0.91	0.34	2.09	0.51	0.19	1.56	2.05	0.76	0.25	2.20	1.94	2.69	1.95	2.39	1.88
	問5⑦ 楽しむ力	1.51	2.03	2.14	1.77	0.27	0.69	2.55	2.84	2.21	3.83	4.35	3.20	2.46	2.53	3.17	1.25	3.23	1.35	3.71
	問5⑧ バランス感覚	2.19	3.79	3.29	4.85	4.48	4.38	3.00	3.42	3.12	3.88	3.58	3.95	3.01	4.35	4.03	4.95	4.19	3.83	4.63
	問5⑨ 礼儀・マナー	0.16	0.04	0.24	0.39	2.37	0.30	0.06	0.90	0.77	1.09	1.41	1.76	0.23	0.18	0.58	0.55	0.02	0.06	0.37
	問5⑩ 成長動機	4.42	8.40	9.02	7.12	9.22	7.82	8.55	7.81	7.78	7.84	8.02	9.32	5.97	8.85	9.34	7.74	10.22	7.36	8.64
	4. 自己成長力	問5⑪ 自己コントロール	1.72	2.46	2.31	2.76	1.44	2.37	2.30	3.02	2.42	3.93	4.34	3.51	2.42	3.48	3.91	2.83	3.51	3.15
問5⑫ 自己理解力		0.10	0.47	0.65	0.09	0.07	0.17	0.57	0.71	1.14	0.04	0.39	0.45	0.91	0.83	0.83	0.70	0.58	1.11	0.14
問5⑬ 自信・自尊感情		1.08	0.57	0.61	0.43	1.37	0.80	1.36	3.15	2.04	4.84	5.23	3.86	2.22	2.72	2.84	2.52	3.47	1.59	3.89
問5⑭ 自己実現力		0.88	1.89	1.29	3.10	4.29	3.26	0.88	2.48	2.11	3.06	2.22	2.83	2.01	1.73	2.08	1.10	1.70	1.14	2.16
問5⑮ 進路決定力		0.48	1.82	1.55	2.38	1.86	0.86	2.24	1.91	2.66	0.76	0.72	1.89	1.69	1.73	1.52	2.00	2.39	0.73	2.00

※図表中の数値は、表頭の教科の各スコアに対する「生きる力」下位能力それぞれのアイテムレンジを表す。
 数値が大きいほど教科の各スコアに対する寄与度が高いことを示す。濃い網掛けは、各列の中での数値の高い上位5項目、
 薄い網掛けは「生きる力」各領域内での上位3項目までを示している。

他者や異なる意見の尊重は、人間関係調整力として重要なものであることは言うまでもないが、年齢が上がるにつれて、自己の相対化が進む中で、子どもたちのそうした行動や意識が、教科学習における異なる解への気付きや思考・判断の幅の広さや深さに関わっていくことを示唆しているのかもしれない。

(2) 学力観点別に見た「生きる力」の影響度について

以上、教科総合スコアについて見てきたが、次に各教科の学力観点にブレイクダウンして、「生きる力」はどのような項目で影響を及ぼしているのかを見ていきたい。同じく図表3-2-8の各教科の3観点の各列の上位5項目(濃い網掛け部分)を見てみると、小5生の国語では、先に見た「成長動機」や「社会対応力」といったベースとなる項目がどの観点においても共通するが、「調査研究力；調べて分かったことをもとに、自分なりの考えを持つことができる」、「作品制作力」、「メディアリテラシー；電子メールやインターネットを使う時は、きまりを守ったり相手の気持ちを考えたりする」、「情報活用力；調べたことを、コンピュータを使ってまとめたり、発表したりすることができる」といった「問題解決力」に属する項目が強い影響力を示しており、特に「書く力」「読む力」といった観点にその傾向が強く見受けられる。

また、小5算数では、「成長動機」と「社会対応力」については国語と同様どの観点においても共通する強い影響を及ぼしているが、「数学的な考え方」について見てみると他の「表現・処理」や「知識・理解」とは若干傾向が異なり、「作品制作力」「社会貢献；社会がかかえる課題について、どうすればよいかを考えたことがある」等の項目で相対的に影響度が強く見受けられ、前述の「国語の書く力・読む力」も合わせて、課題を解決するスキルや社会への関心や態度が、教

科におけるいわゆる「考える力」にも影響を及ぼしていることが推察される。

一方、両教科共に「知識・理解」においては、他の学力観点と異なり、「責任感」という項目の影響度が強く、漢字や計算といった学習のドリル的要素の遂行に関わる一つの要因ととらえるのと納得のいく結果といえるのではないだろうか。

また、図表3-2-9からは、中2生においても、やはり「成長動機」という項目は、各教科のどの学力観点に対しても圧倒的に強い影響力を示している。そして、恐らく生涯にわたって人を「学び」に向かわせる内発的で最も根源的な要素であり、これからの「生涯学習社会」における極めて重要なキー概念であろう。

そういう意味からも、第2章第4節で述べられた「成長動機」の低い3割の子どもたちをどう育成していくのかは、長いレンジを念頭においた極めて重要な課題であろう。

さて、各教科における各学力観点の上位5項目(網掛け部分の位置)を比較すると、国語ではあまり大きなバラツキはなく、「成長動機」「責任感」「作品制作力」「論理的思考力」「バランス感覚」の各項目に集中する。また、英語ではある程度のバラツキは発生するが、やはり、国語と同様「成長動機」「責任感」「作品制作力」「バランス感覚」の4項目に集中する傾向がうかがえる。

一方、数学では、「調査研究力」「情報活用力」等で、各学力観点間における上位5項目の現れ方にバラツキが見られる。つまり、共通する箇所は教科特性や学力観点にあまり関わりのない普遍的要因といえるが、バラツキのある箇所は、教科特性や学力観点による特殊要因と考えられる。

(3) 数学の学力観点に対する生きる力の影響度について

ここでバラツキ傾向が強い中2数学の「数学的な考え方」に焦点を絞って、各学力観点に対す

る「生きる力」の影響度の違いを探してみたい。

図表3-2-9の「数学」を見ると、「数学的な考え方」においては、「論理的思考力；筋道を立てて、ものごとを考えることができる」、「調査研究力；調べて分かったことをもとに、自分なりの考えを持つことができる」、「楽しむ力；楽しいことを見つけることが得意である」といった3項目で他の2観点と大きく異なっていることがわかる。

つまり、これらの3項目が「数学的な考え方」における特殊な要素を表したものであり、「数学的な考え方」のレベルの高さの背景には、「筋道を立てて、ものごとを考え」、「調べて分かったことをもとに、自分なりの考えを持つことがで

き」、更には、あくまで推測の域を出ないが、そうした過程や活動を「楽しむ」というような「創造的な態度や視点」といったものが関与していると考えられるのではないだろうか。

校種は異なるが、本節①でもふれたように、第5章でその実践報告を頂いている京都市立御所南小学校をはじめ、「問題解決型」の「総合的な学習の時間」を展開しておられる学校で、こうした「数学的な考え方」に伸長が見られたといった声もよく耳にする。

今回は具体的な実践事例に沿っての検証は十分とは言えないが、今後の課題として検証を深めていきたい。

4 「教科学力」のレベルから見た「生きる力」のスコアの違い

(1) 教科学力上位層と下位層における「生きる力」の差異

さて、最後に、本章第1節で「学びの基礎力と教科学力の関係」を探った手法とは異なる視点から、「生きる力」と「教科学力」の関係について見てみたい。

図表3-2-10および図表3-2-11は、教科総合スコアの高い順に、児童・生徒をほぼ同数となるように3つに分け、それぞれ上位層、中位層、下位層と操作的に名付け、そのうちの上位層と下位層における「生きる力」の肯定割合を比較したものである。

図表内の数値は、各項目に対して「とてもあてはまる」および「まああてはまる」と答えた割合の合計(肯定割合)を示し、上段が教科学力上位層、下段が教科学力下位層を示す。

また、図表に載せた項目は、教科学力上位層と下位層との回答に1%水準で有意な差異が認められた物のみを抽出しており、各項目の後ろにつけた(*)および(**)は、「とてもあてはまる」と答えた割合の差を検定した結果を示す(*; 5%水準、**; 1%水準で有意)。

これらの図表からも明らかのように、小5生・中2生共に「生きる力」の7割以上の項目で、「生きる力」の肯定割合は1%水準で教科学力上位層>教科学力下位層となる有意な差異が認められ、「生きる力と教科学力との間には正の相関がある」という基本仮説3は改めて検証された。

(2) 教科学力上位者のプロフィールについて

さて、第3章の第1、2節を通して、「学びの基礎力」および「生きる力」と「教科学力」の関係についていくつかの視点・方法から探ることで、「学びの基礎力」および「生きる力」と「教科学力」の間には正の相関があるということを検証してきた。

しかし、それらの関係はあくまでも実態としての相関関係を示すだけで、その因果関係までを示すものではない。つまり、「教科学力との間の相関の高い『学びの基礎力』や『生きる力』を育成すれば、教科学力の向上に直結する」といった特効薬の処方が見えたといったことでは決してない。

第1章で述べられた「総合学力研究会」として

の「学力構造モデル」や「基本仮説構造」にも示されているように、「学びの基礎力」「教科学力」「生きる力」の3つの力は単純な層構造や一方向的な規定関係にあるものではなく、そうした関係をベースとしながらも、相互に関連し合うことで更なる高次の力のフェーズへと進んでいくネットワーク的、スパイラル的な要素をも併せ持つものであると筆者らは考えている。

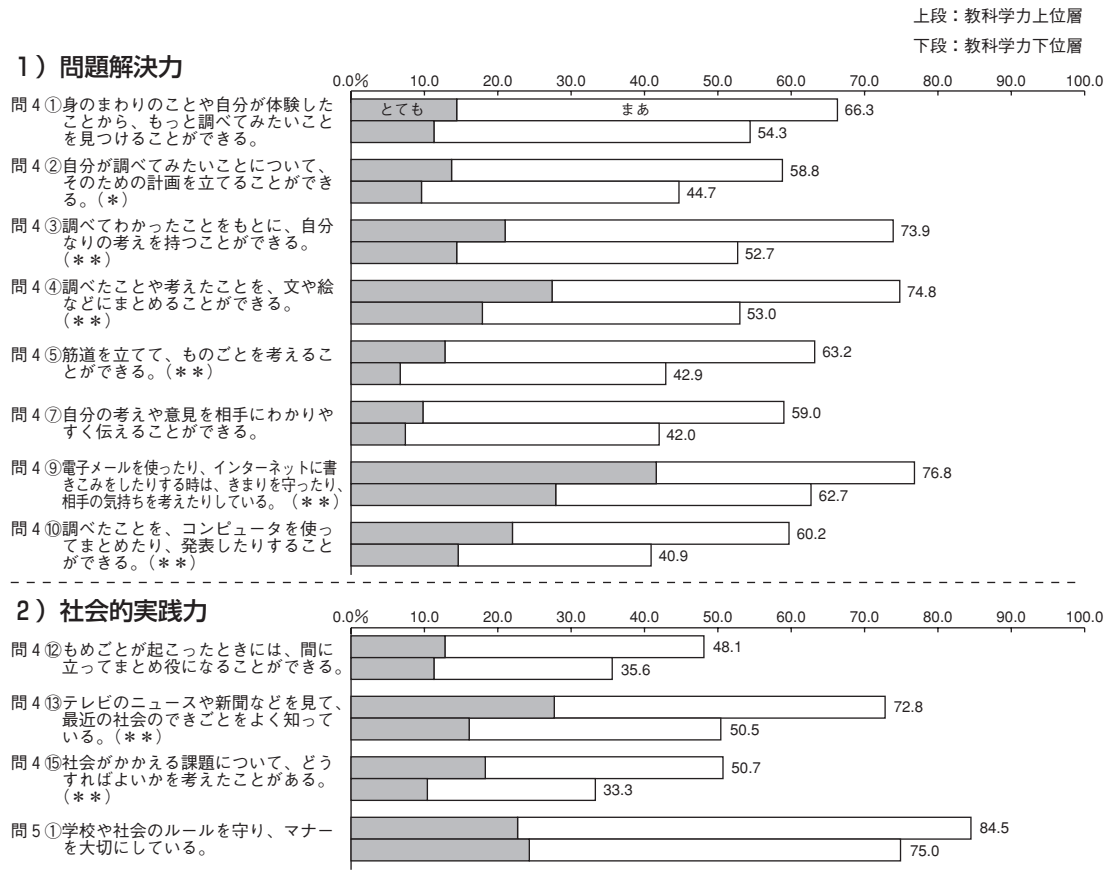
今回のデータ分析からは、そうした「学力のネットワーク的スパイラル構造」の仮説を裏付ける部分的な関係やいくつかの事実を通して、おぼろげながらその輪郭らしきものを探ることはできた。

しかし、教育現場では、そうした「複雑系」の中で日々の実践がなされ、多くの成果が上げられ、そのノウハウや視点は「教師個人の力量」の

域を超えて、学校の中で次第に積み上がり、共有化がなされる形となってきているように思える。今回の調査結果からは、学力向上の特効薬的処方提示はできないが、客観的なデータに基づく「教科学力に関わる諸要素の実態とその関係」を示すことで、教育課題の解決・実践に向けての検討の視点や素材の一例を先生方にお伝えすることはできるのではないかと考えている。

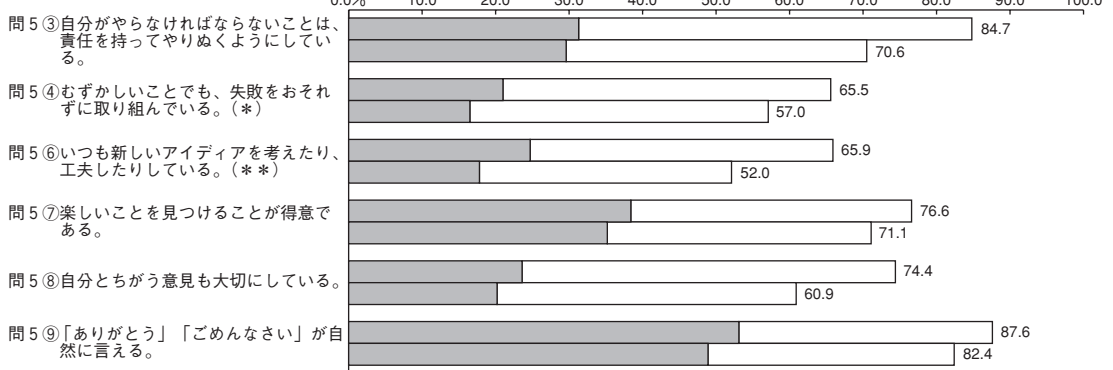
最後に、図表3-2-12に、教科学力上位層と下位層の子どもたちの中で大きく肯定割合の異なる「生きる力」の項目を抽出し、小5生における教科学力上位層の子どもたちの学習に対する意識や態度、行動の特徴的なプロフィールとしてまとめた。なお、誌面の関係でデータは掲載していないが「学びの基礎力」についても同様にまとめているので、ご覧いただければ幸いです。

■図表3-2-10 教科学力上位層と下位層による「生きる力」の肯定割合の違い〈小5〉

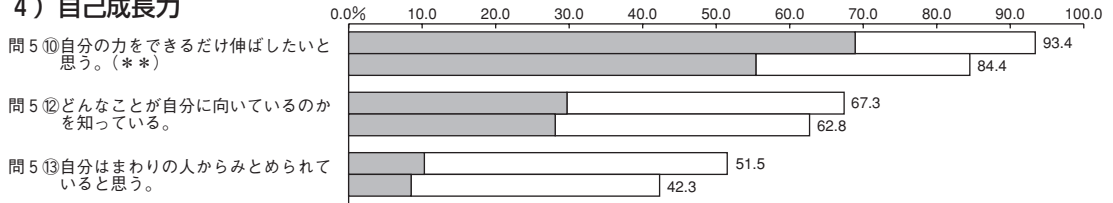


■図表 3-2-10 (つづき)

3) 豊かな心



4) 自己成長力

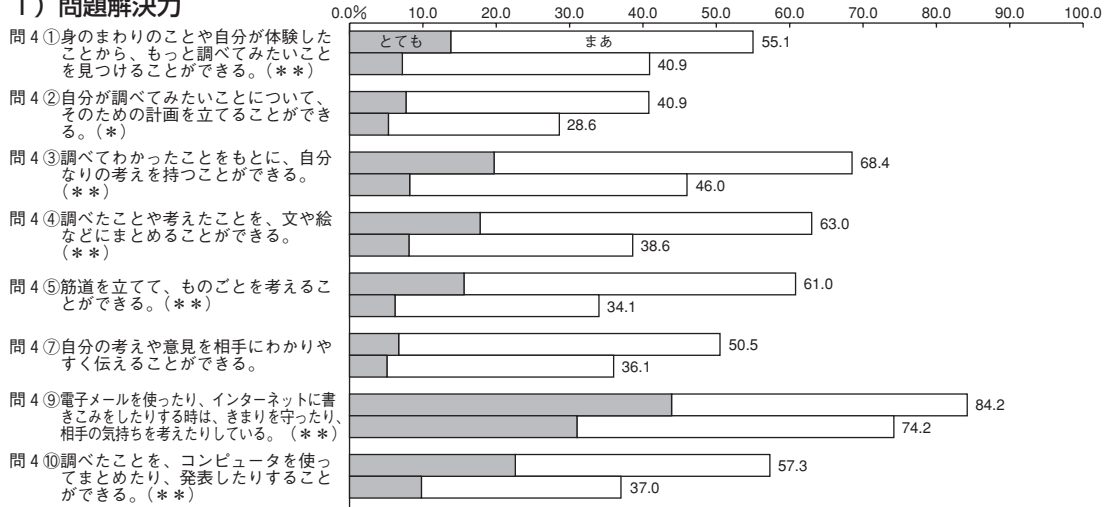


■図表 3-2-11 教科学力上位層と下位層による「生きる力」の肯定割合の違い〈中2〉

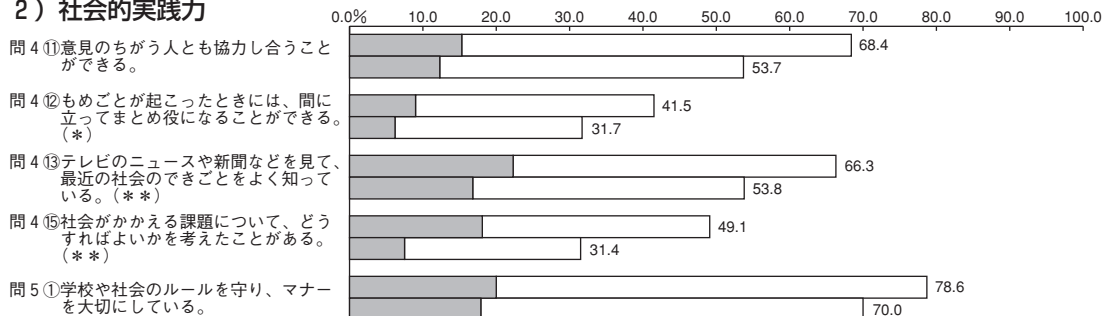
上段: 教科学力上位層

下段: 教科学力下位層

1) 問題解決力

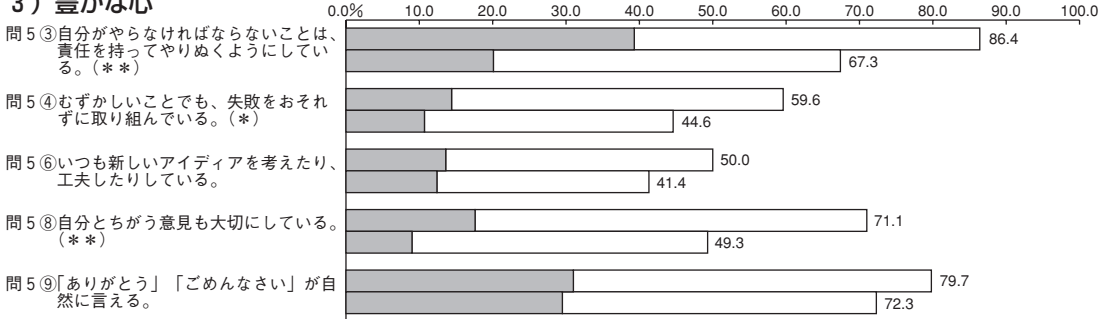


2) 社会的実践力

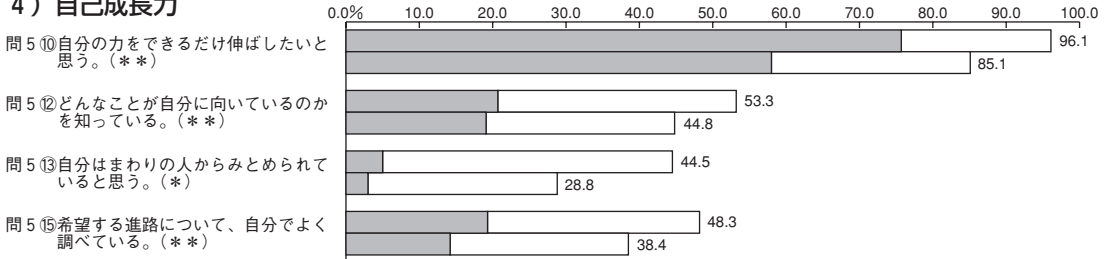


■図表 3-2-11 (つづき)

3) 豊かな心



4) 自己成長力



■図表 3-2-12 教科学力上位層の児童・生徒における特徴的プロフィール

「生きる力」に関して

- ① 筋道を立てて物事を考え、自分なりの意見を持っている。(中2生では課題設定力も高い)
- ② 調べたことや考えたことを適切な手段で表現している。
- ③ 社会に対する関心が高く、自分なりの貢献の在り方を考えている。
- ④ 新しいアイデアを考えたり、難しいことにも挑戦する創造性・積極性を持っている。
- ⑤ 自分の力を伸ばしたいという意志と目標を持っている。

「学びの基礎力」に関して

- ⑥ 新聞やインターネット、書物といった様々なメディアに親しんでいる。
- ⑦ 家族との良好な信頼関係ができています。(中2生では教師や友人との信頼関係も良好)
- ⑧ しっかりと朝食を摂るようにしている。(中2生では朝食を含め生活習慣全般で良好)
- ⑨ 学習の楽しさやおもしろさを感じている。(中2生では知的好奇心や感性もより豊か)
- ⑩ 学習の役立ちや大切さを積極的に認めている。
- ⑪ 物事をやり遂げた経験や喜びを味わっている。
- ⑫ 繰り返しだけでなく、関連させて覚えるという方略も取り入れている。
- ⑬ 学習の計画やめあてを持って取り組んでいる。
- ⑭ 家庭での学習時間を確保し、宿題をきちんとやっている。
- ⑮ 分からない事はそのままにせず、分かるまでがんばっている。
- ⑯ けじめをつけて、勉強に集中して取り組んでいる。
- ⑰ 学校の授業を大切にしている。

なお、中2生では、上記の()の内容と共に、「生きる力」においては「自己の適性や進路についてしっかりと理解し、考えている」、
「学びの基礎力」においては「学習成績の良し悪しを自分の努力の結果と考えて努力している」という特徴が見られ、小5生では見られ
なかった「発達段階」上の特性に関わる特徴が加わってくることを付記しておきたい。

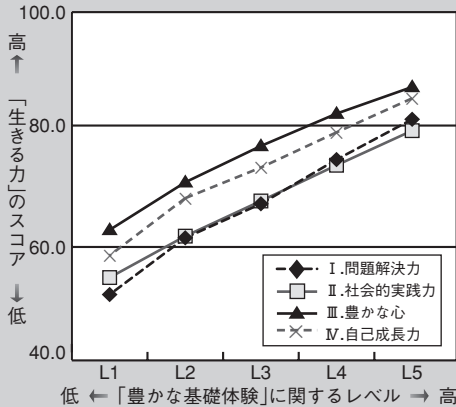
5 「生きる力」と「学びの基礎力」の関係について

以上、本章第1節、第2節を通して、「教科学力」と「学びの基礎力」、そして「教科学力」と「生きる力」のそれぞれの間には正の相関があることを検証してきたが、これらのことから、論理的には「生きる力」と「学びの基礎力」の間には正の相関があることが導き出される。また、第2章第4節で見たように「将来の夢や目標を持っている」といった「生きる力」の「自己成長力」に関わる項目は、学習活動への意欲や自主的な学習といった項目との間に正の相関を示しており、

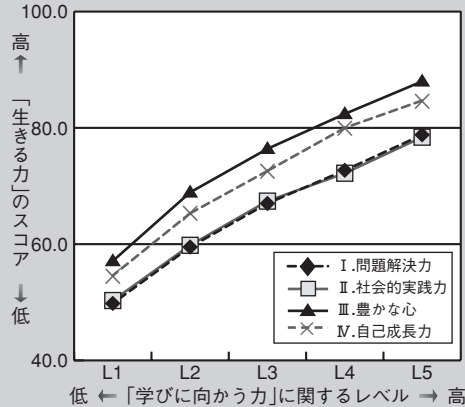
本節図表3-2-2や3-2-3に見るように、「社会対応力」や「成長動機」は、特に「学びの基礎力」の「学びに向かう力」や「自ら学ぶ力」といった領域の各項目との間の正の相関関係の存在をデータとしても検証している。

しかし、これらは特定の項目間の部分的な関係を見たものであるため、ここで改めて、「生きる力」の各領域と「学びの基礎力」の各領域間の相関を全体的に探ってみたい。

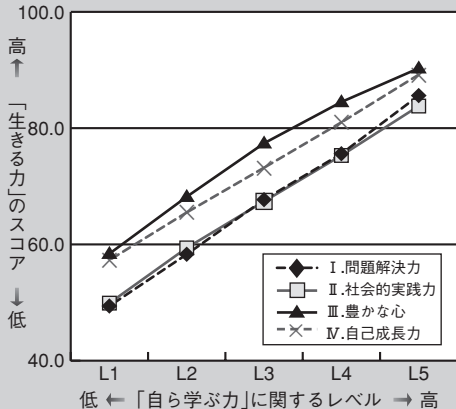
■図表3-2-13 「A. 豊かな基礎体験」のレベルと「生きる力」の関係



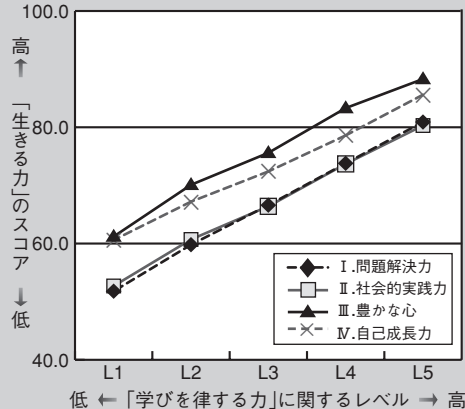
■図表3-2-14 「B. 学びに向かう力」のレベルと「生きる力」の関係



■図表3-2-15 「C. 自ら学ぶ力」のレベルと「生きる力」の関係



■図表3-2-16 「D. 学びを律する力」のレベルと「生きる力」の関係



図表3-2-13～16は、本章第1節で見た「学びの基礎力」各領域と教科総合スコアの関係

を表した図表3-1-2等に準ずる手順で、「学びの基礎力」の各領域について子どもたち(小5

生)をL1～L5の5レベルに分類し、各レベルにおける「生きる力」4領域の総合スコアを比較したものである。

なお、縦軸の数値は「生きる力」の各領域に含まれるすべての下位能力について「とてもあてはまる」と回答した場合を100として、横軸の各レベルにおける平均スコアを示している。

さて、まず図表3-2-13「A. 豊かな基礎体験」のレベルと「生きる力」の関係について見てみると、「豊かな基礎体験」に関するスコアが最も低いL1から最もスコアの高いL5にいくに従って、「生きる力」の各領域のスコアは高くなり、「豊かな基礎体験」のスコアが高い子どもほど、「生きる力」のスコアも高い、すなわち、両者の間にはかなり強い正の相関があることが

読み取れる。

また、「B. 学びに向かう力」、「C. 自ら学ぶ力」、「D. 学びを律する力」についても同様の傾向が見られ、「生きる力と学びの基礎力との間には正の相関がある」という基本仮説2はデータの的にも検証されたと言える。なお、データの掲載は省略したが、中2生についても同様の傾向が見られたことを付記しておく。

さて、図表3-2-17は「生きる力」の各領域についても同様にL1からL5の5レベルを設定し、「学びの基礎力」各領域のレベルとの相関係数を示したものであるが、先のグラフの傾きに現われていたように、全般的に両者の相関はかなり強いことが分かる。

■図表3-2-17 「生きる力」4領域と「学びの基礎力」4領域の相関係数一覧

生きる力 学びの基礎力	I. 問題解決力	II. 社会的実践力	III. 豊かな心	IV. 自己成長力
A. 豊かな基礎体験	0.56	0.48	0.50	0.44
B. 学びに向かう力	0.55	0.52	0.61	0.51
C. 自ら学ぶ力	0.61	0.57	0.60	0.47
D. 学びを律する力	0.53	0.51	0.54	0.37

特に、「I. 問題解決力」と「C. 自ら学ぶ力」、「III. 豊かな心」と「B. 学びに向かう力」および「C. 自ら学ぶ力」においては、0.60以上の強い正の相関関係が見られる。

第1節、第2節では、教科学力に対する影響度の強い領域として、「学びの基礎力」における「自ら学ぶ力」、および「生きる力」における「問題解決力」の2つの領域が挙げられることを見てきたが、上で見たように「問題解決力」と「自ら学ぶ力」との間にも強い相関関係が見られ、これらが相互に関連し合い、高め合いながら、教科学力の更なる向上を支える支柱となっていることが推測される。

第2章第3節でも触れられているが、「学びの基礎力」の各下位項目においては、他の項目を前提として初めて成立するようなクリティカルパス的な関係構造が存在することは経験的にも知られており、「生きる力」においても同様のことが言える。そして、更には「学びの基礎力」と「生きる力」のそれぞれの下位項目間においても、ネットワーク的関連やクリティカルパス的な関係構造の存在が予想される。

この辺りについては、現場の先生方のご意見を頂戴しながら、今後の課題として更に詳細の検討・考察を加え、三者間の構造をより具体的に解明していきたい。